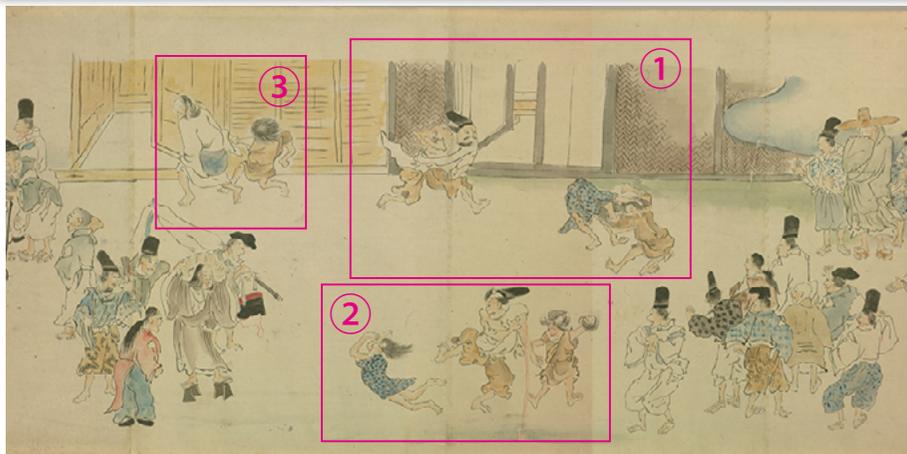


古代

第4章 貴族政治の展開 1. 摂関政治 (1) 藤原氏北家の発展

おうてんもん
応天門の変と因幡の豪族



『伴大納言絵巻』(国立国会図書館デジタルコレクション) 中巻

【書き下し文】
『日本三代実録』貞観八年八月三日条
左京の人・備中権史生大初位下・大宅首
鷹取、大納言伴宿禰善男、右衛門佐伴宿
禰中庸等、同じく謀りて火をつけ、応天門
を焼く」と告げき。
同八年十月二十五日条
(前略) 越前国足羽郡の人・生江恒山、因
幡国巨濃郡の人・占部田主等、備中権史生・
大宅鷹取を殴傷し、あわせて鷹取の女子を
殴殺しき。恒山等言はく、「私の主、右衛
門佐伴宿禰中庸の教に随ひて、鷹取の女子
を殴殺しき」と(後略)。



解説

資料画像は『伴大納言絵巻』の一部で、^{ばんだいなごんえまき} 応天門の焼失が^{おうてんもん} 大納言の^{ともよしお} 伴善男の放火であったことが発覚するきっかけとなった子どものケンカを描いた場面である。画面には、次の①～③の場面が異時同図法*によって描かれている。

- ①子ども同士がケンカしている。右側の無地の着物の子どもの父親(父1)が、画面左側から走ってくる。
- ②父1は二人をひきはなし、ケンカ相手の子どもを蹴飛ばした。
- ③無地の着物の子どもは、母親に連れられて帰って行く。

絵巻の詞書によると、この場面の後、伴善男の家人である父1が「大納言様がいる限り、おれが何をしようとおのお咎めもないさ」と言ったところ、蹴飛ばされた子どもの父親(父2)は「おれが口を開いて大納言の秘密をばらせば、大納言はただではすまないのだぞ」と答えた。この後、父2は取り調べを受け、伴善男が放火するのを目撃したと証言した。

実際の事件の真相発覚の経緯は、この絵巻とは異なる。『日本三代実録』によると、「伴善男・中庸の父子が^{おおやけのたかとり} 応天門に放火した」との大宅鷹取による告発があり、その後、鷹取への暴行並びにその娘を殺害した件で、伴中庸の従者である生江恒山らへの訊問が行われた。恒山らは「放火は中庸がおこなった」と証言したが、父の善男が命じたものと判断され、善男父子、鷹取の娘を殺害した恒山と^{うらべ} 占部田主(因幡国巨濃郡(現在の鳥取市の一部と岩美町)出身)らは遠流となった。(なお、娘を殺されたため鷹取が訴えたのか、訴えられた報復として恒山らが鷹取親子を襲ったのかは不明)。

絵巻の物語が史実を反映しているとする、他人の子どもを虐待する父1のモデルの一人は、因幡出身の占部田主ということになろう。彼も、藤原種継暗殺の実行犯となった^{ほうきのむねまる} 伯耆桴麻呂と同じく、都の貴族との関係を深めることによって、地元での一族の勢力を伸ばそうとしていたものと考えられる。

*異時同図法…物語の展開を担う主人公を、同一の構図の中に複数回登場させる技法。時間の推移を表現するために用いられる。

(担当：石田敏紀)

参考資料

- ・鳥取県『鳥取県史1 原始・古代』(1972年) (とっとりデジタルコレクション)
- ・神谷正昌『清和天皇』(吉川弘文館 人物叢書 2020年)